

新社会人へエール送る

神奈川県生産性本部は4月6日、「新入社員基礎実務コース」を横浜市内で開催した。当日の研修プログラムは、第一部「産業界労使トップ講話」と第二部「基礎実務研修」で構成された。本欄では、第一部「産業界労使トップ講話」における野村高男・同本部会長（鹿島建設副社長執行役員横浜支店長）と吉坂義正・連合神奈川会長の講演要旨を中心に紹介する。

新しい価値の創造めざせ

神奈川県生産性本部会長 野村高男氏



私は、1975年施工系社員として鹿島建設に入社し、4月7日にいきなり現場に配属された。静岡県の大仁カントリークラブというゴルフ場の建設現場だ。伊豆の山中にあるので、社員と多数の職人で現場の宿舎に寝泊りした。右も左もわからずほとんど休みもなく、朝早くから夜まで時には徹夜したこともある。年末年始の休みに入り、工事関係者が国に帰ることになり、自分も休めると思ったら、新人は現場にいらると言われ現場を離れられなかった。40度近い熱を出したが誰も助けてくれなかった。とても無理だと思い、年が明けたら辞めようと思っていましたが、学生時代に成績が良くなかったのに当社に入社できたことを両親がすごく喜んでくれたことを思い

出し、しばらくはここで働くことにした。社会人人生は、楽しいことよりも厳しいことの方が多い。そうした中でも頑張っている。日本経済の現状は

■日本経済の現状は

私が神奈川県生産性本部の会長を引き受けたのは、生産性を上げないと日本経済は沈没すると思ったからだ。企業価値を表す「時価総額」では、1989年には、上位10社中7社が日本企業だった。2019年には、36位ようやくトヨタ自動車が増え、2020年には、1996年時点では日本は米国に迫る勢いであったが、その後日本はほぼ横ばいで、2020年時点では、米国は日本の4・2倍、中国は3倍になった。日本経済は、マラソンで言うところの疲労困憊で歩いている状況だ。国家予算で見ると、2022年度一般会計予算では、歳入の61%を税収で34%を国債発行で占めている。歳出と税収の差は「ワニの口」と称され、コロナ

拡大）を回していかなければならない。日本は技術立国で、優秀な人材が多いという幻想を捨てることがだ。

■生産性向上に向けて

日本の低い労働生産性の課題とその対応方法は、①不要なストック・価格競争による労働生産性の低下（効率化し勤勉に働いて生産を増やせば皆が幸せになるという旧来の日本企業のビジネスモデル）は、高度情報化社会となった現代ですべてに限界で、これからは、量よりは質、価格ではなく多様な付加価値に依ること、②無駄の多い働き方（書類捺印と書面が必須の事務処理、定例会議など生産性に関係ない「ルールに則すること」が目的になっている働き方）は、会社の風土をすべてとせざるを得ない、③過剰品質・過度のサービス（目に見えないサービスは無料とする風潮）は、生産性の低下をもたらす。過度な品質を見直し廉価版を考案、開発は完全ではなく拙速を旨とすること、目に見えない情報やサービスを有料化させる仕組みやビジネスモデルを構築することだ。

「生産性向上には、技術の進歩や生産の効率化での「根本的な成長」が必要で、単に新しいものをつくる「技術革新」だけでなく、新しい考え方や新技術によ

■先輩として伝えたこと

学生時代と大きく環境が変わる。忙しなくなり、長期休暇はなかなか取れなくなるので新しい自分のペースを作る。自分では選べない人間関係の中で働かなくてはならない。いやな人間関係（上司、

先輩、お客様）は時間とともに変わっていく。永遠ではないので我慢すること。心の持ち方は、人と比較して一喜一憂しないこと。「一人は人、吾は吾なり」とにかくに、吾が行く道を、吾は行くなり」（哲学者・西田幾太郎）。良いことも辛いことも、一度きりの人生として味わう。

■「憂きこと」なおこの上に積もれかし

「憂きこと」なおこの上に積もれかし、限りある身のためさん（陽明学者・熊沢蕃山）。生活態度が素直な人ほど成長が速い。部下や上司など人の話を素直に聞き、自分の糧とする。悪い会話（上司や会社の悪口、家庭の事情などの愚痴）には加わらない。自分の仕事を見つめて働くことが重要だ。

■日本経済を再生できる圧倒的な生産性向上を起せ

日本経済を再生できる圧倒的な生産性向上を起せる人材に育ててほしい。心身の健康に留意して、これからの長い社会人生活を頑張りたい。心の不調はなかなか治らない。危ないと思ったらその仕事から一時避難することも必要で元気が戻ったら戻ればよい。



「基礎実務研修」の研修風景

たとえば、テニスやバドミントン。シングルスはもちろんですが、ダブルスも魅力的だと思いませんか。緻密な戦略を立てながら、互いを助け合う。コンビネーションが勝利のカギになります。ダブルスのように、ヒトとロボットが手を組んだ新しい取り組みが建設業でも始まっています。「鹿島スマート生産」。ヒトとロボットによる、スマートな生産プロセスが実現していきます。

ヒトとロボットがつくる、新しい建設業へ。

100年をつくる会社
鹿島



この広告は、音声を聴きながら見られます。
鹿島建設ラジオCM
鹿島スマート生産「ダブルスのように」

「ヒトとロボット」が
生産性向上の
鍵となります。

